

〈贈る言葉〉

杉野先生に感謝の一言

松 村 延 昭

杉野徹先生をお送りする時が思いの外早くやってきた。特任教授になられたばかりであるし、まだしばらくはご一緒させていただくものばかり思っていた。個人的には、昨年度の *Asphodel* 44号が発行され、編集後記に目を通した折に初めて先生が退職されることを知ったしだいである。ご存じのように、杉野先生は同志社女子大学のみならず、同志社全体に計り知れないほどの大きな貢献をなされたのであるが、そのほんの一部をここに紹介したい。

杉野先生は1969年4月に宇部短期大学英語英文科助手に就任されたのを端緒に、英語教員生活を40年以上続けてこられた。1973年4月からは同志社大学工学部へ移られ、1986年4月に同志社女子大学へ移籍された。1年後の1987年に短期大学部英米語学科へ入ったわたしにとって、先生はあくまで他学科の先生であったのだが、同志社大学から同志社女子大学へ移ってこられた先生の話は耳にしたことがなく、珍しいケースだなと漠然と考えていた。しかし、先生のコールリッジを中心としたロマン派詩人に対する卓越した研究、だれに対しても寛容に対応される高潔な人格を勘案すると、当時の英文学科の先生方が「杉野先生を是非女子大に」、と望まれた気持ちもよく理解できる。

女子大学にこられてから先生は労をいとわず、誠心誠意学校のために尽力されてきた。1988年から2年間は英文学科の教務主任を、1990年から2年半の間は学科主任を務められた。1996年4月からの1年間はリベラル・アーツ委員長として、当時はまだ諸々の責任体制が定かではなかった共通学芸科目を統括する大役を引き受けられた。当時の教務部長であった森淑子先生と杉野先生の掛け合いは、一委員として会議に参加していたわたしの目にも微笑ましく響き、堅苦しい会議の雰囲気は大いに和らげていただいた。

そう、杉野先生は峻厳で傍に寄ることも適わない、といった先生では全くなかった。誰にでも分け隔てなく気さくに話しかけられた。エレベーターなどに乗り合わせた折、先生が学生に優しく声をかけられ、学生も嬉しそうに答えているのを何度も目撃したことがある。学生に対しても本当に距離の近い先生であったが、それは内面に厳格な教育者としての一面を秘めた近しさであった。

先生は、1999年4月からは文学研究科英語英文学専攻博士前期課程教授に、2004年からは博士後期課程の教授にもなられている。また、2007年から2年間は、文学研究科英文学専攻主任を務められた。その大学院で担当された学生のひとりが論文を書くことができなかった。同級生や後輩が次々と修了していく中、先生は頑として安易な妥協はされず厳しくその学生に接しておられた。しかし先生は、「論文が書けないのは自分の責任である」と突き放されることは決してなかった。ご多忙な中、暮れも正月も返上してその学生に心血を注いで指導され、彼女は無事修了した。教師とはこうあるべきなのだな、と深く心に刻まれた一件であった。

他の先生や事務職員には反抗的で心を開かない学生もいたが、先生の前では涙を流しながら本音を語ったこともあった。誰の話も無視することなく耳を傾けられるだけでなく、「杉野先生に聞いてもらいたい」といった雰囲気巧みに作られた。杉野先生は、「先生、質問」とおっしゃってよく他の研究室を訪問された。わたしのような若輩者の部屋にもこられた。短大から合流した者と元から英語英文学科にいる者との間には、なにか微妙な溝のようなものが当初はあったのだが、先生のそのようなフレンドリーな姿勢のおかげで、いつの間にか溝は埋まってしまっていた。1999年4月から2005年3月までの長期間、同志社幼稚園の園長を兼任されたのも、先生のそのようなお人柄故の抜擢であったのだろう。

門外漢のわたしには先生の研究に関して詳しく語るができないのだが、数多くの論文、著書、翻訳書を精力的に執筆しておられる。本学大学院にも

先生の名声を慕って入学してくる他大学出身者が何人かおり、それは先生の卓越した学識の証であろう。先生の多数のご業績・出版著書をひとつひとつ挙げることはできないので、ごく最近の翻訳著書のみを紹介したい。先生はこの4月に、アイルランド詩人シェイマス・ヒーニーの最新作の詩集『郊外線と環状線』(2006年度T. S. エリオット賞受賞作品)の共訳著を出版なさった。この翻訳には3年間を要したと伺っている。そう言えば、先生をお見かけする時は必ずヒーニーの原作詩集を小脇に抱えていらした。

学外でも先生は、1992年からはイギリス・ロマン派学会の理事を、2001年4月には学校法人博愛学園理事長を、2005年4月からは同志社幼稚園後援会長を、2007年4月からは日本英米詩歌学会理事を務められ、活発な活動により広く社会に貢献されている。

忘れてはならないのが、2006年4月から務めてられた、同志社女子大学英語英文学会会長としての先生である。先生の広い交際範囲があればこそ、多くの著名な先生方を夏期公開講座に招聘することが可能となった。また、日本全国の支部を訪ねられ支部組織を強固なものとした。英語英文学科の学生数減少による英文学会の財政上の苦境を救うため、身を粉にして活動されていた先生の姿は記憶に新しい。

このような先生の数知れない本学へのご貢献により、当然のこととも言えるが、今年4月2日に同志社女子大学名誉教授の称号が先生に授与された。先生に心からお祝いを申し上げたい。これで先生とわたしたちのご縁は名実ともに永続的なものとなった。嬉しい限りである。

退職後の先生は瀬戸内海に浮かぶ故郷の生口島イクチジマに帰られ、教会を母体とする博愛幼稚園の園長になられる。よく学生の礼儀の欠如を嘆いておられた先生が、人間としての基盤を築く年代の子どもたちと触れられるのは、子どもたちにとってもまたとない好機となるであろう。温暖で穏やかな土地にて、子どもたちに囲まれた先生の姿が目に見えようである。しかし、同志社女子大学のこともお見捨てにならないようお願いしておきたい。できれば、

月に1度くらいは以前のように各研究室を訪ね歩き、何かとアドバイスを
していただきたい。わたしたちは、鎌餅でも何でも先生のリクエストされた品
を用意してお待ちしております。実利主義がはびこる現在の大学であればこ
そ、先生の良心から発せられるお言葉が必要なのです。杉野先生、いつまで
もお元気で過ごしてください。